

ふみあと

第6回「山の日」全国大会が山形県で開催された。収束が見えないコロナや線状降水帯による豪雨が危惧されるなか、記念行事は予定通り実施された。

元々「山の日」は、山岳団体が最初に提案した。国民の祝日にするため国会議員に働きかけた結果、「山の日」制定協議会を立ち上げてからわずか5年で祝日となった。私は登山を代表して活動に関わり、全国大会にも第1回から欠かさず参加しているのだが、最近は実際に山には登ったことがないと思われる議員や行政機関代表の挨拶が目立ち、登山団体の影が薄くなってきた。

明日に架ける橋

今回はオプショナルツアーの「蔵王プラン」に参加して、クアオルトウォーキングを体験し、蔵

王古道の由来を学び、アサギマダラの乱舞やコマクサの大群落に出会えた。しかし、記念式典で紹介されていた議員の多くは、公務多忙でこういった「山の恩恵」を体験していないだろう。

また、残念な光景も目にした。世界的にも有名な樹氷で知られるアオモリトドマツが広範囲に立ち枯れていたのだ。200名山、船形山の山麓では、登山道が整備不良、伐採時期を迎えているはずの杉林も放置されていた。写真を見たり話を聞くだけでなく、実際に登山をしなければ課題は見えてこない。仕事や生活に忙しい人ほど山に親しむ余裕を持つて欲しい。

さて、10月開催予定の全国登山研究集会では「伊藤新道復活プロジェクト」の講演が生まれ

ている。伊藤新道は、北アルプス最後の秘境、湯俣川から三俣山荘への登山道で、整備のためにクラウドファンディングを募った結果目標金額を大きく上回った。かつて5本架けた吊橋を3本にして渡渉のある冒険的要素の高いルートになって今秋開通予定である。同時に、夏季には台風の影響、冬季には豪雪となる沢沿いのルートは維持管理の面からは大きな挑戦となる。3本の吊橋が未来の登山文化を創造する原動力となるだろう。

一方、この夏は死亡事故も続いた。世界中で懸命に生きている人々がいる。私たちは甘い判断や準備不足、不完全な知識によって山で命を落としてはならない。共に希望の橋を架け、明日へと繋いでいこう。

(川嶋高志/日本勤労者山岳連盟 理事長)